Aug. 26 / 14:45-16:15 / AC348

Shaping the Future of Education and Assessment in the Age of AI

<ETS Japan> Sevak, Amit (ETS); Kondo, Yukie (Ritsumeikan U.); Mizumoto, Atsushi (Kansai U.); Yoneda, Kenzo (Waseda Osaka High School); Shiozaki, Shuken (ETS Japan)

The use of AI has rapidly become commonplace across workplaces, research environments, and educational settings, and this pace of transformation is expected to accelerate further as AI technologies continue to evolve at an unprecedented speed. Against this backdrop, this symposium aims to explore how these global, AI driven changes are influencing the future direction of education in Japan, with a particular focus on English education and assessment. Experts from diverse professional and academic backgrounds will share perspectives and engage in discussion on current developments, challenges, and future possibilities. Through these discussions, the symposium seeks to provide practical insights and forward looking perspectives that will serve as useful reference points for educators actively engaged in teaching at universities and high schools.

Aug. 26 / 16:35-17:05 / AS365

基礎表現の「自動化」を促進する英語教材の開発：反復練習の体系化と段階的負荷調整に着目して

<Asahi Press Inc.> Nakanishi, Noriko (The U. of Osaka); Asahi, Eiichiro (Asahi Press Inc.)

大学英語教育において、学習者が既有の知識を無意識に運用できる「自動化（Automaticity）」の段階へと高めることは、流暢なコミュニケーション上不可欠である。しかし、実場面での即座な発話に困難を感じ、自信を喪失する初級学習者は少なくない。本発表では、徹底した反復練習と段階的な負荷調整（scaffolding）を組み合わせ、4 技能 5 領域を統合した初級者向け教材の開発事例を紹介する。本書の設計における核心は、一つのトピックに対して「対話」「練習」「自己発信」の 3 段階サイクルを繰り返す構成にある。各レッスンを 10 文前後の短文構成に統一し、ページの一部を隠して反復できる物理的なレイアウトを採用することで意図的な反復を促し、基本表現の自動化を支援する。また、学習の継続性を担保するため、FKGL（難易度指標）を用いてレベルを緩やかに上昇させ、認知的負荷を適切に管理している。本教材は、スピーキングにおける「やり取り」と「発表」の両領域を軸に、リスニング、ライティング活動を網羅的に配置している。また、各レッスンの後半に設けられたイラストや図表を用いた「図表読解（Reading）」のタスクでは、カレンダー、マップ、メニュー、時刻表といった日常的な視覚資料から必要な情報を抽出する活動を通じ、4 技能 5 領域をバランスよく、かつ実生活に即した文脈の中で統合的に学習できる工夫を凝らしている。内容面では「Global Englishes」の視点に基づき、米・英・豪など多様な背景を持つ話者によるアクセントや語彙の違いを積極的に取り入れた。さらに、出席管理と習熟度チェックを兼ねた巻末提出シートの完備により、多様な授業形態における教員の負担軽減にも配慮した。本教材は、繰り返し練習と情報の処理を通じて学生の成功体験を積み重ね、自信を醸成するための確かな足場かけを提供することを目指している。

Aug. 26 / 17:10-17:40 / AN325

英語のニュアンスと文化理解を重視した英文法教材の開発

<KINSEIDO Publishing Co., Ltd.> Omotedani, Junko (Kobe Gakuin U.); Nakajima, Andy Fumihito (Kobe Gakuin U.); Nishina, Yasunori (Kobe Gakuin U.)

本発表では、金星堂より刊行予定の大学向け英語教科書『Fine Points—Grammar Through Nuance and Culture』の概要を紹介する。本教科書は、英語に含まれる微妙な意味の違い（ニュアンス）に着目し、文法・語彙・文化を関連づけながら、実際のコミュニケーションで活用できる英語力の育成を目指すものである。従来の文法学習が形式的な知識の習得にとどまりがちであるのに対し、本教科書では「使える英文法」をキーワードに、具体的なコミュニケーション場面の中で文法を理解し運用する力を養うことを重視している。全 15 ユニットで構成され、品詞、時制、完了形、助動詞、受動態、不定詞、動名詞、分詞、比較、関係詞、仮定法など、大学初級から中級

レベルの主要文法項目を扱う。対象は CEFR A2〜B1 レベルを想定しており、語彙や文構造についても段階的に学習できるよう配慮している。各ユニットは会話を中心に構成されており、留学先での日常生活や大学生活、旅行、アルバイトなど、学習者に身近で多様な場面を通して学習を進める。また、リスニングによる内容理解、穴埋めによる表現確認、ロールプレイによる運用練習を段階的に組み合わせることで、学習内容の定着と運用力の向上を図る。さらに、各ユニットの最後に、リーディングの内容をもとにロールプレイを行い、理解した文法や語彙を実際の言語運用へと結び付ける構成としている。本教科書のもう一つの特徴は、“How is it different?”と題したコラムである。ここでは、類似語や類似表現の使い分け、文法形式による意味やニュアンスの違い、さらには文化的背景の違いが表れる表現などを取り上げる。学習者は「正しい英語」だけでなく「自然な英語」への理解を深め、英語らしい表現感覚を養うことができる。本発表では、本教科書の構成や特色を紹介するとともに、ニュアンス理解を軸としたコミュニケーション英文法指導の可能性について考察する。

Aug. 26 / 17:45-18:15 / AS365

理工系学生向け英語教材 Science Talk の開発と授業実践

<National Geographic Learning> Kudo, Tae (Kwansei Gakuin U.)

本発表では、理工系学生を対象とした英語教材 Science Talk: Communicative English for Science and Technology の開発経緯とそれを用いた授業実践を報告する。本教材は、理工系分野において求められる英語コミュニケーション能力を把握するため、物理や化学実験、研究活動の見学ならびに理工系教員・学部生へのインタビューを実施し、その知見をもとに開発された。教材は日常的なやり取りから、データの説明、実験手順の紹介、研究内容の共有、学術的交流の場面に至るまで、理工系の学習・研究活動に即した内容を段階的に扱う構成となっている。授業では、モデルスピーチや対話例、理系語彙の確認に加え、ロールプレイやペア・グループ活動を取り入れ、学習者が実際の文脈に即して発話する機会を確保した。実践の結果、学生は理工系場面で必要とされる表現への理解を深めるとともに、英語による口頭表現への心理的負担を軽減し、発話に対する自信を高める傾向が認められた。発表では、教材開発の背景と授業実践の具体例を示し、本教材の特長を紹介するとともに、授業目的や学習者のレベルに応じた活用方法を提案する。

Aug. 27 / 09:00-09:30 / AC341

CEFR-J Wordlist および CEFR-J Grammar Profile に基づく単語帳・文法問題集の構築：生成 AI を用いた DiQt 教材開発の実践

<BooQs Inc.> Aikawa, Shinji (BooQs Inc.)

本発表では、CEFR-J Wordlist および CEFR-J Grammar Profile に基づき、DiQt 上で A1〜B2 レベルの英単語帳と英文法問題集を構築した実践を報告する。生成 AI を用いた語義・例文・選択肢、穴埋め・整序・書換問題の作成、CEFR-J 項目との対応づけ、人的確認による品質管理の手順を示し、レベル別教材開発における AI 活用の可能性と課題を検討する。公開後の改善可能性にも触れる。

Aug. 27 / 09:00-10:30 / AC348

Language Assessment in a Digital-First Era: Responsible Innovation at Scale

<Duolingo English Test> Park, Yena (Duolingo)

Language assessment in a digital-first era: Responsible innovation at scale
Advances in technology come with opportunities to enhance all stages of language assessment from development and delivery to administration and scoring. Technological advances have afforded assessment programs with operational efficiencies, as

well as the means to tap into a wider range of construct-aligned behaviors and processes with innovative assessment tasks, administer items more efficiently for measurement precision, and deliver a high-stakes test remotely in a secure way, resulting in better test-taker experience. Situating the discussion in a theoretical assessment ecosystem framework for a digital-first test (Burstein et al., 2025), I exemplify how technology can be harnessed responsibly to enable principled innovation in all stages of high-stakes language assessment, using the Duolingo English Test as a case example. First, I discuss specific ways in which technology can be leveraged to address long-standing challenges in standardized large-scale high-stakes testing when developing assessment tasks. Second, I show how advanced psychometric practices can lead to measurable improvements in reliability by comparing Interactive Speaking, an adaptive interview speaking task, to a non-adaptive monologic speaking task. Finally, I highlight several in-house platforms that support (a) multiple cycles of iteration that underpin all assessment development activities through rapid large-scale data collection, (b) item development and review at scale, and (c) consistency in high-stakes proctoring decisions. I will conclude by highlighting the role of technology as a tool for assessment programs to better

Aug. 27 / 09:35-10:05 / AC345

What Makes a “Hot Topic”? 4 Keys to Effective Class Discussion

<Tryalogue Education> Bermingham, Sean (Independent author-editor)

Choosing suitable discussion topics is crucial for encouraging lively interaction among students. But why do some class discussion topics work well in Japan, and others don’t? In this session, the presenter will share some recent findings from a research project conducted among Japanese university teachers. Attendees will explore four simple but essential criteria that can be used for identifying effective discussion topics for Japanese high school or university English classes.

Aug. 27 / 10:10-10:40 / AS363

近畿大学情報学部の英語カリキュラムにおける ICT の活用と Web 教材の導入

<SEIBIDO Publishing co.,Ltd> Mihara, Kei (Kindai U.)

本発表では、英語の授業内容や指導計画の中に、どのように ICT を組み込んで活用しているかを紹介します。2022 年 4 月に開設された近畿大学情報学部では「外国語科目はメディア授業」という方針のもと、英語の授業はすべて Zoom を使い、100%オンラインで実施しています。対面授業にはない、メディア授業のメリットを活かす上で欠かせないのが、どのような教材を選び、いかに活用するかということです。リンガポルタや EnglishCentral が付属した成美堂のデジタル教科書を使用し、オンラインでの TOEIC 対策、動画をベースにした発音や語彙の演習、AI 講師との対話などを、1 年次、2 年次、3 年次に配当された必修科目・選択必修科目の授業に組み込み、Google Classroom などを通じて学生にフィードバックをしています。学生は 3 年間を通して、授業内だけでなく、授業外でもオンラインで英語力を向上させるための学習ができるようになっています。Learning Management System のリンガポルタは、TOEIC L&R のスコアアップのために利用しており、2 年次の教科書がリンガポルタ対応ではないため、追加料金を払って、他の教科書のリンガポルタを使用させてもらっています。また、EnglishCentral 社が情報学部用にアレンジしてくれたコースを 1 年次に全員が利用しているため、3 年次の授業で EnglishCentral 付属の教科書を使用することにより、学生は再度、動画ベースの様々なエクササイズを通じて、授業外でもオンラインで英語に触れる機会を確保しています。このような事例を紹介し、大学の英語の授業で ICT を活用することのメリットと可能性を探るとともに、今後の課題についても検討したいと思います。

Aug. 27 / 10:55-11:25 / AN325

「測る」から「育てる」へ―カリキュラムにおけるスピーキングテストの活用―

<Pearson Japan K.K.> Owada, Kazuharu (Ritsumeikan U.); Usami, Akinori (Ritsumeikan U.); Shimizu, Yuko (Ritsumeikan U.)

教育現場におけるアセスメントは、成績のためだけではなく、学習の質を高め、教育改善につなげるシステムとして位置づけられる。我々の英語プログラムは、非英語専攻の学習者を対象に初年次に 3 種類の英語科目を 2 学

期間提供しているが、これら３科目はゆるやかな連携を保ちつつ、レベル別で教材・シラバスは統一しており、入学時のプレイスメントテストおよび入学直後に実施するテストを診断的評価として位置づけている。各科目においては、小テストや課題の積み重ねとフィードバックにより形成的評価を行い、学習過程に対する気づきを促進している。今回の発表の中心となるスピーキング力については、総括的評価の一環として Versant Speaking Test を実施し、学習者が自身の音声面における学習効果を実感できる機会を設けるとともに、英語プログラム全体の有効性を検証することを目的としている。本テストの採用理由としては、信頼性の検証等を基に改良がなされていることに加え、AI を活用した自動音声認識および自動採点システムにより、発話を一貫した基準で測定可能である点が挙げられる。また、テスト実施の効率性および結果の即時性という実用的側面も導入の決定につながった。本テストと英語プログラムの親和性と妥当性について検証を重ねているが、昨年度のテスト形式の変更（Versant Speaking and Listening へ）に加え、対象となる学習者層の変化も踏まえ、測定指標としての妥当性の再検証が求められている。こうした背景のもと、ピアソン・ジャパンにより、問題形式および受験方法に関する日本語の説明動画が初めて制作され、受験前に当該動画を視聴させる取り組みにより、テストの表面的妥当性が高められる可能性が示唆される。本発表では、4 月に実施された Versant Speaking and Listening の受験直後の質問紙調査の結果をもとに、学習者の認識および態度を分析し、本テストのカリキュラムにおける位置づけと妥当性を再検討し、今後のアセスメントの在り方について考える。

Aug. 27 / 11:30-12:00 / AC345

3 種の AI 連携による高精度ライティング評価ツール活用のご提案

<Kirihara Shoten K. K.> Iwase, Kyoichi (Kirihara Shoten K. K.)

AI 技術の急速な発展にともない大学の英語教育の現場でも指導・評価における AI 活用が進んでいます。他方、AI 活用における手間（プロンプトの作成や入力の手間）、ブレ（タイミングによる評価スコアの変動）、ウソ（ハルシネーションと呼ばれる AI による事実と異なる情報の生成）の問題が顕在化しています。弊社は上記の問題のソリューションとして、ライティング評価ツール、「桐原 AI エッセイライティング」をご提案します。「桐原 AI エッセイライティング」は、独自の言語推論 AI が主体となり、2 種類の生成 AI（Gemini、ChatGPT）と連携しつつ、それらをコントロールすることで、「手間無し、ブレ無し、ウソ無し」のライティング評価を実現します。

Aug. 27 / 14:45-15:15 / AC341

OpenALT：オープンソース英語能力評価システムとチャットボット型スピーキング評価の開発

<EnglishCentral JAPAN K.K.> Matsuoka, Sayaka (EnglishCentral JAPAN K.K.)

OpenALT は、学習者の英語力の把握と成長測定を目的としたオープンソースの英語能力評価システムである。CEFR 準拠の語彙評価を行うコンピュータ適応型テスト（CAT）と EI（Elicited Imitation）によるスピーキング評価を統合し、学習者の語彙知識、意味知識、暗黙的文法知識、流暢さ、リアルタイム処理能力を測定する。本発表では、OpenALT の設計思想と測定アプローチを紹介するとともに、ICNALE ルーブリックを活用したチャットボット型スピーキング評価の開発について紹介する。また、実際の試行運用を通じて得られた知見や課題を共有する。

Aug. 27 / 14:45-16:15 / AC348

AI 時代における評価と指導の在り方

<The Japan Institute for Educational Measurement, Inc.> Takamura, Kyoko (The Japan Institute for Educational Measurement, Inc.); Taguchi, Atsushi (Okayama U. of Science); Iino, Atsushi (Hosei U.); Kumar, Edward (The Japan Institute for Educational

Measurement, Inc.); Namikawa, Kazane (The Japan Institute for Educational Measurement, Inc.)

近年、英語教育の現場において生成 AI の活用が急速に広がっている。スピーキングにおける対話練習の相手や英文の自動添削、フィードバックコメントや学習アドバイスの自動生成など、多様な実践が積極的に共有される一方で、教育的妥当性（学習効果や学習目標との整合性）や学習評価との接続に関する課題や懸念も顕在化している。特に、生成 AI を利用して作成された英文の評価の在り方や、生成 AI を通じて蓄積される学習データの活用可能性、それらをいかに評価へと結び付けるかについては、十分な知見が蓄積されていないのが現状である。本シンポジウムでは、生成 AI 学習ツールのデータを活用した研究発表に加え、教育現場における AI を活用した指導・評価の実践報告を行う。研究発表では、AI 採点・添削ができる英語学習サービス「UGUIS.AI」のデータを用い、2,000 人以上の学習者のライティング解答とフィードバックから誤りの傾向を分析するとともに、指導への示唆を提示する。実践報告では、授業内および自宅学習における生成 AI 活用の成果と課題を共有し、それらが評価にどのように寄与し得るかを検討する。さらに、パネルディスカッションでは、AI 時代に求められる英語能力、指導と評価の接続、今後重視されるべき評価観点等について議論する。

Aug. 27 / 15:20-15:50 / AC345

English for a Connected World: Building Global Competence With Surpass

<SANSHUSHA Publishing Co., Ltd.> Ledezma, Michael (NE Build & Grow)

ESL education is currently positioned as one of the most promising platforms to teach global competencies. However, one major stumbling block that continues to plague ESL is relevance. As general ESL courses tend to emphasize everyday communication, more substantive topics are often brushed aside. To address this problem, educators have begun placing greater emphasis on Intercultural Communicative Competence (ICC) in ESL instruction. By combining language learning with substantive, meaningful content grounded in a global citizenship perspective, ICC-based lessons can help boost student motivation while offering unmatched opportunities for teachers to incorporate critical 21st-century skills into their lessons. In this presentation, I will walk teachers through a number of ICC-based young adult and adult ESL lessons from the Surpass coursebook series by Sanshusha, in collaboration with NE Build & Grow. Unlike typical ESL coursebooks, in which topics are covered and then quickly forgotten, the Surpass series uses a cumulative learning approach that allows students to explore a topic and immediately revisit it from a different perspective. This multifaceted lesson design helps students retain more of what they have learned while also deepening their topical knowledge. Additionally, the series' emphasis on intercultural learning and global themes prepares students to wield English not only as a communicative tool, but also as a cross-cultural bridge. Using materials in the CEFR A2–B1 range, I will demonstrate concrete learning strategies that teachers can apply in their classrooms when using Surpass. I will also provide a detailed breakdown of the methodology behind the book's design and how it achieves the desired effect. With a better understanding of the fundamentals of ICC and 21st-century skills, teachers will not only help students develop their language abilities but also crucial cognitive skills and global awareness to better navigate the world of tomorrow.

Aug. 27 / 15:55-16:25 / AN321

AI を活用したスピーキング指導と自律学習の支援—ELSA を用いた授業実践—

<ELSA Japan> Furushima, Kazuya (ELSA Japan G.K); Imao, Dai (ELSA Japan G.K)

生成 AI の普及に伴い、大学英語教育では AI を授業にどのように取り入れるかが重要な課題となっています。一方、多人数クラスにおけるスピーキング評価の負担や、学習者の継続的な発話練習、自律学習をどのように支援するかについて、多くの教育現場で試行錯誤が続いています。本発表では、AI スピーキングプラットフォーム「ELSA」を活用した授業実践と、その教育的可能性について紹介します。まず、ELSA をはじめとする AI 音声評価ツールの特徴を概観し、発音・抑揚・流暢性などのフィードバック機能や、教員による評価・指導を支援する仕組みについて説明します。あわせて、国内外の実践研究をもとに、AI を活用した学習が学習者の発話への心理的負担を軽減し、自律的な学習や学習意欲の向上にどのように寄与するかを紹介します。さらに、学習履歴や評価データを授業改善やフィードバックに活用する方法、AI との会話練習を取り入れた授業設計など、教育現場における具体的な活用事例を紹介します。当日は、教育機関向け ELSA を搭載したタブレットを配布し、学生用

画面や教員用ダッシュボード、AI によるフィードバック機能を体験していただきます。参加者が実際の授業をイメージしながら活用方法を検討できる機会とし、AI を活用したスピーキング指導と自律学習支援の実践的なあり方について考えます。本発表はワークショップ形式で実施し、当日は、教育機関向けの ELSA がインストールされたタブレットで学生用機能や管理ダッシュボードを手元で直接操作・体験する。本発表を通じ、参加者へ単なる技術紹介に留まらず、AI を活用した自律的な学習設計と英語教育の質保証に向けた具体的な手法を提示する。

Aug. 27 / 15:55-16:25 / AN325

調音器官レベルの AI 発音指導による英語音声教育の可能性—PronTest Engine を用いた実践と学習成果—

<Prontest.Inc> Okumura, Yuya (Prontest.Inc)

調音器官レベルの AI 発音指導による英語音声教育の可能性—PronTest Engine を用いた実践と学習成果—
本発表では、調音器官レベルの AI 発音指導が英語学習者の発音能力およびリスニング能力に与える影響について報告する。株式会社プロンテストが開発した PronTest Engine は、舌・唇・歯などの調音器官の動きを分析し、学習者に対して具体的な修正指示を提供できる AI 発音判定エンジンである。本実践では、大学生学習者を対象に、PronTest Engine を用いた発音学習群と、同時間をプレゼンテーション練習等に充てた比較群の学習成果を検証した。学習期間は 30 分×10 回の計 5 時間とし、学習前後で CASEC による測定を実施した。その結果、発音学習群では CASEC のディクテーション項目において比較群より約 20%高い向上が見られ、有意な差が確認された。また、発音の正確性向上も観察された。これらの結果は、調音器官レベルでの発音指導が発音技能だけでなく音声知覚能力にも影響を与え、リスニング力向上に寄与する可能性を示唆している。本発表では、発音学習とリスニング能力の関連性について考察するとともに、PronTest シリーズを活用した英語音声教育の実践事例と AI 活用の可能性について報告する。

Aug. 28 / 09:00-09:30 / AN325

英語 e-ラーニングシステム「ぎゅっと e」のコンセプトとその活用

<HOKUSHIN EIDEN> Aoki, Nobuyuki (Hiroshima English Education Laboratory); Watanabe, Tomoe (Hiroshima English Education Laboratory)

ぎゅっと e のコンセプトは、EFL 環境での外国語学習に不可欠な大量の練習を通じて、英語処理の自動化とチャンク化を促進し、熟達化を支援することにある。本発表では、ぎゅっと e の基本コンセプト、効果的な学習管理方法、さらに、管理ツールで得られる学習の量や質等に関するデータを AI と組み合わせた学習分析の可能性について報告する。

Aug. 28 / 10:20-11:50 / AC348

4 技能評価における「話す・書く」の位置づけ：TOEIC® Tests と TOEIC Bridge® Tests の結果データを用いた二段階ベイズ bifactor S-1 分析による検討

<The Institute for International Business Communication> Ushiro, Yuji (Japan International U./Professor Emeritus, U. of Tsukuba); Komuro, Ryuya (Tohoku U.)

英語の 4 技能テストでは、Listening/Reading と Speaking/Writing のスコアは概して強く相関する。そのため、受容技能の力さえわかれば、産出技能のスコアはおおむね予測できると想定される。もしそうであれば、Speaking/Writing をあえて別に測定・評価する意義は薄いと考えられる。しかし構成概念の非同一性に加え、

Listening/Reading では捉えきれない産出技能に固有の個人差レベルでの誤分類のリスクが存在する可能性があり、Speaking/Writing は独立した評価対象として扱う必要がある。本発表はこの問いについて、TOEIC®（3,957 名）とTOEIC Bridge®（2,862 名）のデータから英語 4 技能の内部構造を検討する。Listening/Reading の基礎力を統計的に考慮したうえで、Speaking と Writing のあいだになお共通した個人差が残るかを検討した。まず、Listening/Reading の項目反応から受容技能の基盤を推定した。次に、Speaking/Writing を Listening/Reading の基礎力・課題差・項目差のみで説明するモデルと、それに加えて Speaking と Writing に共通する残差因子を認めるモデルを比較した。「共通した残り」とは、受容技能の高低だけでは説明できない、Speaking と Writing に横断して現れる相対的な得意さ・苦手さを指す。結果として、この共通因子の大きさは両テストでほぼ同じであった。推定値はいずれも 0.752（95%信用区間：TOEIC は[0.688, 0.813]、TOEIC Bridge は[0.683, 0.818]）であり、Listening/Reading が同程度でも、Speaking で相対的に高い受験者は Writing でも高い傾向が強いことが示された。この傾向は、受験者層もテスト構成も異なる両テストで一貫していた。つまり、Listening/Reading が高くても Speaking/Writing では内容構成・即時応答・産出の安定性において別のつまずきが生じうること、逆に Speaking/Writing が相対的に保たれる学習者も存在することが示唆される。この結果は、独立スコアの強い運用を主張するものではなく、Speaking/Writing を独立した側面として扱う意義を裏づける内部構造上の示唆として位置づけられる。授業や評価においては、Listening/Reading の成績のみから Speaking/Writing を類推するのではなく、両者を別に観察してプロフィール差を指導・課題設計・フィードバックに活かすことが求められる。受容技能と産出技能のあいだに乖離を示す学習者を見落とさない視点が重要であると考えられる。

Aug. 28 / 10:55-11:25 / AC345

コミュニケーションをゴールにするライティング教材『TAGAKI（多書き）』

<mpi Matsuka Phonics Inc.> Ito, Miyuki (mpi Matsuka Phonics inc.)

自ら考え、書いて伝える力を養う「TAGAKI メソッド」をご紹介いたします。本メソッドはライティングを軸に、最終的なゴールを「伝える」というコミュニケーションに置いた学習法で、特許を取得しています。全 10 冊のシリーズのうち、今回は上級向けの「Advanced 1・2・3」に焦点を当て、それぞれの特長や指導法、効果的なアウトプットのバリエーションについて、ワークショップを交えてお伝えします。従来のライティング教材とは異なり、TAGAKI メソッドは以下の点に重点を置いています。

・自ら考え、発信したくなる仕組み：和文英訳や穴埋めではなく、自分の意見を持つことを促します。
・段階的なステップアップ：英語力とが学習年齢に合わせ、1 冊につき 30 のトピックを収録。4 技能をフル活用してトレーニングを行います。
・自己修正力の育成：文法ベースの添削を待つのではなく、集中力を高めて自ら修正する力を養います。

100%の正確さよりも「100%自分の意見を持ち、自信を持って発信する」ことを目指す、TAGAKI メソッドの魅力をぜひご体感ください。